

平和・自立・調和の日本をつくるために【993】

《今日の論点(1)》【新時代の国土交通省論・1】太田昭宏大臣は、国交省の「中興の祖」です／太田昭宏大臣時代になって国交省は国民の生命を守る人間尊重の国家公務員集団になりました／建設産業は自信を取り戻しました／太田大臣の10の業績

「政道は正直慈悲を本として決断の力あるべきなり」(神皇正統記)
「徳をもって人に勝つ者はさかえ、力をもって人に勝つ者は亡ぶということあり」(源平盛衰記)

新自由主義グローバル革命以来、眠っていた獅子が目を覚まし、国民の生命を守る人間主義の公務員集団として復活しつつあるように私には思えます／太田昭宏大臣は国交省の「中興の祖」だと私は思います。

この1年数か月間に、国土交通行政は見違えるほど変化しています。私は、「社会資本の整備なくして日本の社会経済の発展なし」との考え方に立って、政治と経済政策のあり方を論じてきましたが、新自由主義グローバリズムの強風を押し返すことができず、最近に至るまで敗北に敗北を続けてきました。

10年ほど前、『公共事業必要論』（日本評論社刊）を書き、公共事業の大切さを世論に訴えました。このとき、今回、自民党総務会長に就任した二階俊博先生に支援していただきましたが、結果は二階俊博先生にご迷惑をおかけすることになりました。新自由主義グローバリズムにとらわれた大マスコミの壁は厚く、打ち破ることができませんでした。さればと、6年前に『新公共事業論』（日本評論社刊）を著し、再度挑戦しましたが、ますます厚くなった新自由主義グローバリズムの壁にはね返されました。その後も『建設産業復興論』（日刊建設工業新聞社刊、2009年）などの著書を書き、社会資本整備の重要性と建設産業の大切さを訴えましたが、敗北を続けました。この間、日本の産業経済の基盤となるべき建設産業は衰退を続けました。社会資本は荒廃しました。

しかし、この1年数か月間に、日本は社会資本整備に向かって動き出しました。この中心にいて、社会資本整備への道を開いたのが太田昭宏国土交通大臣でした。そのほか、二階俊博自由民主党国土強靱化総合調査会長（自民党総務会長）が、自由民主党内の考え方を変えるために働きました。藤井聡京都大学大学院教授が国民世論を変える上で大きな業績を残しました。

国土交通省は甦りました。1970年代の石油ショックを境に登場した新自由主義グローバリズムの嵐が吹き荒れ始めてから眠っていた獅子がやっと目を覚まし、人間社会を守るために動き出したのです。全国数万の国土交通省職員は人間尊重主義に立って国民の生命・財産を守るため、日夜働いています。この先頭に立っているのが太田昭宏大臣です。

戦後、国土交通省の前身の建設省と運輸省の果たした役割はきわめて大きいものでした。戦後の目覚ましい高度成長の基礎を支えたのは建設省と運輸省でした。1964年の東京オリンピックに際しては、建設省は道路交通網の整備をかりました。運輸省は鉄道、航空、港湾の整備に取り組みました。この社会資本整備のための努力によって、戦後日本の奇蹟的な高度成長は成し遂げられたのです。

しかし、1970年代に日本にとって不幸な事件がおきました。二度にわたる石油危機です。第一次石油危機のショックで、田中角栄首相が推進していた日本列島改造計画が挫折しました。石油ショックが生み出したハイパーインフレーションに潰されたのです。さらにイギリスとアメリカに起こった新自由主義革命の嵐に全世界が巻き込まれました。日本も新自由主義革命の荒波に飲み込まれました。新自由主義的経済政策のもとでは社会資本の整備は後回しにされました。建設省、運輸省は忍耐の時代を強いられました。

日本経済社会の基礎となるべき社会資本整備は冬の時代に入りました。以後30年以上にわたって続いてきた公共事業の冬の時代がいま、終わりつつあります。国ど交通省に「中興の祖」と言うべき新しいリーダーが登場したのです。日本経済の新しい時代が始まりました。太田昭宏国交大臣と二階俊博自民党国土強靱化総合調査会長（自民党総務会長）によって、社会資本整備が国策の中の課題になったのです。太田大臣は国交省の「中興の祖」です。

じつは、私は、太田昭宏大臣を個人的にも知っています。すばらしい人です。明るくおおらかな人です。知的にも道徳的にもすぐれた人です。国民を愛する心を人一倍もっています。大きな仏心の持ち主です。「男心に男が惚れて…」という古い歌謡曲がありますが、私は太田昭宏さんという政治家に惚れ込んでしまっています。

私よりもはるかに太田昭宏さんに近い人がいることを知りました。埼玉県議会議員の福永信之さん（公明党）です。太田さんと福永さんは『公明新聞』の記者として共に働いた仲です。太田さんが4年先輩だそうです。福永さんは社会資本論の専門家でもあります。この1年数か月の太田国土交通行政の研究者でもあります。「太田研究」の第一人者です。

私は、福永さんに、太田国土交通大臣のこの1年数か月の業績を10項目にまとめてほしいとお願いしたところ、驚くべきことに福永さんは二日間徹夜して、私のために太田大臣の業績表をつくってくれました。以下に紹介します。

《福永信之さん（埼玉県議会議員＝公明党）がまとめた太田昭宏国土交通大臣の10の功績

①建設業者を蔑む風潮に、ピリオドを打った

「コンクリートから人へ」という民主党のキャッチフレーズほど、建築・土木工事で働く大事な大事な皆さんの誇りを傷つけ、生活苦に陥れた言葉はない。日本の政治史上、最悪の言葉である。太田大臣は「命を守る公共事業」という考え方を国民の間に定着させつつある。

②公共事業設計労務単価の大胆な引き上げ＝建築・土木工事現場で働く人の賃金引き上げ

この制度が始まって以来、労務単価は下落の一途をたどっていた。特に民主党政権時代は公共事業予算を激減させたため、ダンピング受注が相次ぎ、前年の実績調査に基づいて算定される労務単価は大幅に下がり、とりわけ若年の建設労働者の建設業離れを招いた。2013年4月の全国平均15.1%引き上げは「太田大臣でなければ絶対に成しえなかった政治決断」の賜物である。14年1月にも7.1%の引き上げを行った。

③小中学校の耐震化の実現

2000年、太田衆院議員が国会で質問した時点において、文部科学省は小中学校の耐震化率を把握していなかった。調べたことすらなかったから、データがあるはずはなかった。今でこそ「学校の耐震化」の重要性を、すべての国民が認識し、ほぼ工事完了に近いところまでこぎつけたが、2000年に太田さんが「最も早く、強く」訴え、公明党全体として推進したからこそ、ここまでこぎつけることができたのだ。

*予算の大幅増、地方自治体負担の軽減、民主党政権が事業仕分けで予算カットした時に徹底抗戦し撤回させた。

④国土交通省を身近な役所にした「現場に立つ大臣」

大規模災害が発生すると、国土交通省の専門家チームが直ちに現場へ急行し、原因の調査と対策の立案にあたっている。太田大臣も最優先の公務として現場へ駆けつける。太田大臣ほど「現場に立つ国土交通大臣」は、過去にいなかった。太田さんは「現場には、臭いがある。叫びがある」と語り、現場主義を貫き、課題解決へ、迅速に手を打つ。ここまでの確に国土交通省を動かす大臣はいなかった。大臣の指示が、迅速、的確であるからこそ職員が緊張感をもって機敏に対策を講じるようになり国土交通省は、国民に身近な役所となった。

⑤「日本の国土のグランドデザイン」を具体化

少子化、高齢社会、そして人口減によって「地方が消滅する」という危機感

を抱く人は多い。だが、具体的な対策にビジョンを抱いて動いている政治家は果たしてどのくらいいるのか？ 太田さんは今年7月に、2050年を見据えた「国土のグランドデザイン」を発表した。「対流促進型国土の形成」である。政治家は、自分の亡きあとまで見据え、課題解決のビジョンを描き実行に移してこそ、本物であるといえる。太田さんは本気で「日本を考える」大臣である、

⑥自分の言葉で役所を動かす大臣

官僚の書いた文章を読むだけ、官僚からの報告を聞くだけの大臣も、正直言って過去には少なくなかった。太田大臣は違う。「現場を歩いた皮膚感覚」をもとに、課題解決に向け「想像力」「構想力」をめぐらせ対策を打ち出し、国土交通省を率いる大臣である。太田大臣の指示は、的確である。太田大臣は緩慢を許さない。

だから、迅速に対応する国土交通省に生まれ変わった。太田大臣は、言葉の遊びではなく真の意味の「政治家主導、大臣主導」の「国民から頼りにされる国土交通省」を築いている。

⑦観光立国・日本を大きく推進

2013年に訪日した外国人旅行者は1036万人に達した。2012年は836万人だったから、1年間で約200万人も増えたことになる。「元気なところに人は集まる」が太田大臣の口癖。でも、1000万人達成を「一里塚」とすると太田はとらえ、さらなる高みをめざしている。

⑧バッジがなくても活躍し続けた政治家

東日本大震災の後、太田さんは繰り返し被災地へ足を運んだ。落選中の身だった。被災者から生の声を聴き、東京へ舞い戻ると、自身のあらゆる人脈を駆使し、公明党を動かし、被災者の要望に応じて続けてきた。船を流された漁業者に会ったときは「何が足りない」と尋ねたのは太田さんである。「燃油、餌、氷が足りない」の叫びに対して駆けずり回り「カツォ漁」を復活させたのは太田さんである。仮設住宅に住む被災者に「大型客船を使ったショートステイ」を実現したのも「議員バッジのなかった太田さん」である。この真っ向勝負、がっぷり四つに取り組むところが太田さんの真骨頂である。「落選中の人の実現するなんて。しかも、自分の選挙区でもなんでもないので」。太田さんが現場へ行った後には必ず「まさか実現するなんて」という驚嘆の声が相次いだ。

⑨「公共事業メンテナンス」の重要性を国民全体に知らしめ、大臣就任後、2013年をその「元年」にした功績

「防災・減災ニューディール政策」は2012年春に公明党が打ち出した政策である。公明党は4月に「防災ブックレット」を党の予算で1000万部近く印

刷し、啓発用DVDも大量に制作した。数か月後には「世界最速のスピードで社会資本を整備した日本が、世界最速のスピードで社会資本の老朽化が進む」ことを声高に叫び、防災・減災ニューディール政策の重要性を訴える啓発用DVDも制作した。国民の心に根を張っていた「公共事業悪ダマ論」を打ち砕いたのは、草の根からの公明党のこうした啓発活動に負うところが大きい。そして、「言うだけ」ではなく、太田さんは、実現に向かってまい進している。

⑩想像力をめぐらせ、知恵を絞る政治家

公共事業を見る目が厳しかった時代に、太田さんは公明党代表としてバリアフリー政策を打ち出し、促進した。この政策は我が国の建設業者を下支えした。「脆弱な国土である日本にとって、建設業で働く人が何よりも大事だ」という信念があるからこそ、そこから想像力をめぐらせ知恵を絞って出てきた政策である。

〈福永さんの参考メモ〉

太田さんが京都大学へ入学したのは1964年。名神高速開通、新幹線開通、東京オリンピックなど高度成長の幕開けの年である。太田さんの入学から2か月後の6月に新潟地震が発生。開通して1年の昭和大橋が崩れた。太田さんが耐震工学を専攻するきっかけにもなった。大地震への備えを本格化させなければならぬ時に、太田さんが国土交通大臣でいること自体が、天のめぐり合わせであるように思える。

安倍内閣の閣僚で中国の副首相級と対談したのは、太田さんが初めて。訪中経験が多く、人脈も太い。》

太田大臣と福永埼玉県議との関係は兄と弟のごときものです。お二人ともかつては『公明新聞』の優秀な記者でした。「公明新聞』の記者はすべて優秀です。その中で太田さんは天才的と言われるほどの優秀な記者でした。福永さんも同様の優秀な記者でした。福永さんは太田大臣の国土交通行政をよく研究しています。

以上の太田大臣の中の功績はすべての的確です。福永さんから教えられるところ大です。

国民の、国民による、国民のための官庁である国土交通省は甦りました。激しくなった自然災害から国民の生命を守るため、一生懸命に働いています。建設業界も甦りました。社会資本を整備すれば日本は甦ります。太田大臣はこの新しい流れの先頭に立っています。この太田国交相を自民党の側から支えているのが、二階俊博新総務会長であり、政府の側から支えているのが藤井聡京都大学大学院教授（内閣参与）です。不肖、私、森田実は国民社会の最底辺で小さな声で応援する太田ファンの一人です。